

チューリップ土壤伝染性ウイルス病を抑制するための施肥技術の開発

富山県農林水産総合技術センター 園芸研究所

1. 背景とねらい

チューリップ条斑病および微斑モザイク病は、オルピディウム菌によって媒介される土壤伝染性ウイルス病害です。両病害は10年以上圃場の汚染が継続するばかりでなく農薬等による単独技術では防除できないため、チューリップの持続的な安定生産を困難にしています。

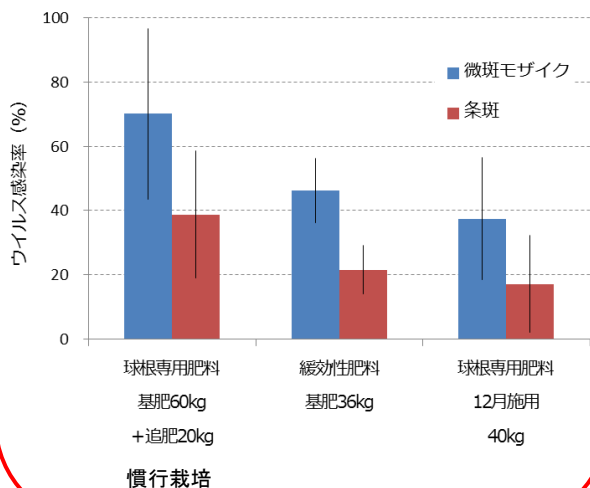
そこで、本研究では、施肥の時期や量を変えることで両病害の発生を抑制するとともに、慣行施肥並の球根収量を得る方法を明らかにしました。



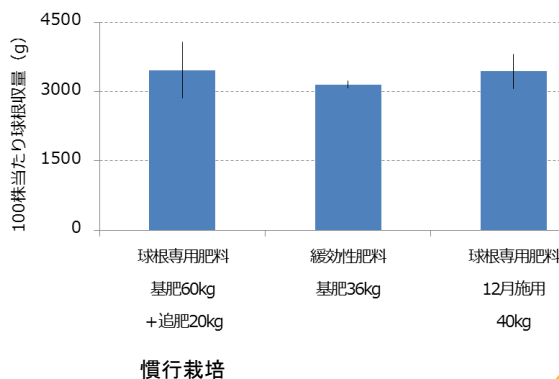
チューリップ条斑病および微斑モザイク病

2. 成果の内容

施肥法の改善による発病抑制



減肥しつつ球根収量を維持



慣行栽培(フミンホスカ 基肥60kg、12月追肥20kg)と比較して、バルブクイーンの基肥36kg施用によりウイルス感染率は35~45%減に、フミンホスカの12月40kg施用によりウイルス感染率は47~55%減になり、球根収量はほぼ同等得られる。

さらに抵抗性品種、遅植え、農薬等を組み合わせて

発病抑制技術の体系化



本県チューリップ産地の安定的維持・発展